法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-09

木下夕爾の文学とその背景(9) : 日本語の心と含羞

岡田, 秀子

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要. 人文科学編 / 法政大学教養部紀要. 人文科学編
(巻 / Volume)
112
(開始ページ / Start Page)
73
(終了ページ / End Page)
110
(発行年 / Year)
2000-02
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004833

Hosei University Repository

木下夕爾の文学とその背景（九）

――日本語の心と含羞――

岡田秀子

国語学者、大野晋の近著『日本語練習帳』（一九九九年一月発行）が発行から八ヶ月を経た八月現在、すでに二三刷を越え、帯には百万部突破と記されている。本が売れず、老舗の出版社がつぎつぎ倒産している昨今、この売れゆきは日本語の危機を察した人たちの一つの意志表明とも思える。

日本語と日本人の心は切っても切れない関係にあることは文字通り衆知のことだからだ。

四年前の一九九五年、『百万回生きた猫』（一九七七年発行以来、ロングセラー）の著者・佐野洋子は、絵本・児童文学研究センター主催の「文化セミナー・日本語と日本人の心」のパンフレットに出席予定者として次のような意見を寄せている。

「世の中全体が思いやりがないようになっているのではないか。だから、もう日本語がどうのこうのいう前に、人間がすでに本来の言葉を失ってしまったのではないか」。

思いやりの心は、それをあらわす言葉を知っていて適切な使い方をすれば相手の心に届くものではなく、まして日本語の独習によって、思いやりの心を急速にとり戻せるものでもない。

木下夕爾も今から三四年も前、日本人がかつては持っていた他者を思いやる心を失ったことへの絶望を詩にしている。

Hosei University Repository

長い不在

かつては熱い心の人々が住んでいた
風は窓ガラスを光らせて吹いていた
窓わくはいつでも平和な景をとらえることができた
雲は輪舞のように手をつないで青空を流れていた
ああなんという長い不在
長い長い人間不在
一九六五年夏
私はねじれた記憶の階段を降りてゆく
うしなわれたものを求めて
心の鍵束を打ち鳴らし

この詩は、初出では〝ドームに寄せて〟の副題がつけられていて、原爆投下二十周年にあたる一九六五年八月六日、中国新聞特集号に載せるために依頼されたものであったが、夕爾の死によって、絶筆となった。『定本・木下夕爾詩集』には最末尾に置かれ、副題は、はづされている。

広島、長崎と二度にわたる原爆投下で日本は無条件降伏をした。しかし、ほんとうに滅びていったのは東洋の思想に基づいた日本の文化であり、それこそが人間が存在する基盤であったことが、五四年を経た今、はっきりして来た。

原民喜や峠三吉のような被爆体験を持たない夕爾の詩に地元の新聞は何を求めたのだろうか。夕爾は自らが詩人としての生涯をかけて思索してきた日本語と日本人の心についての危惧を『長い不在』という詩の一篇として遺し

Hosei University Repository

たのではないだろうか。

夕爾の長女晶子さんの回想記によると、亡くなった時、病室の床の間には、「虹立つや人馬賑はふ空の上　朔」という短冊を表装した軸が下げられていた。萩原朔太郎の句で、しかも晶子さんがこの句を見たのははじめてであった。「退院して来た父が自分で掛けたらしい。なぜ空の上で人馬が賑わうのか、句の意味がよくわからなかった。しかし父が空の彼方に逝ってしまった時だったから、空の上も寂しくないような、偶然にしては不思議な気がした」とある。夕爾は萩原朔太郎をほんとうに憧憬していたようだと改めて思う。それも床に掛けられているのが詩ではなく酔っぱらった時書いた俳句であることに私は興味が湧く。鬼籍に入った詩人たちも混じって人馬賑わう空に自分も舞い上って仲間入りすることを床の間の軸によって暗示するこの伝達は誰に向っているのだろうか。女流俳人の句に母の命終を看りながらよんだ「現世（うつしよ）と黄泉（よみ）の境の花吹雪」という句があるが、これは現世に身を置くものの理智の目で死に向ってたゆたう命をとらえきったことで俳句になっているが……

俳句の革新はいろいろあったが、いつも反俗の方向をとった。芭蕉だけは雅語の柵をとり外すことで短詩型文学に新しい生命の泉を発見することかできた、とみる外山滋比古は、芭蕉の俳句における「冷え」を語る文章の中で次のようにいう。

近代文学は感情移入を中心に進んできたために、市民的主観的であることが独創と結びつき高く評価されている。しかし、人間を中心と考えない詩観からすれば、おもしろいものの方から心によびかける客観移入が詩の原理として脚光を浴びることになる。生れるのは神話的古典的性格のつよいものになるであろう。ここに自己否定が潜在する。すくなくとも小さくこり固まった自己は否定される。そうでなくては短詩型の中によく大きな世界を収めることはできない。

客観移入を容易にするには、季語のように自然への手がかりが様式として定まっていることは便利であるが、これを感情移入への足がかりとすることもできるわけで、実際に、そういう俳句はおびただしくある。しかし、

Hosei University Repository

俳句が真に俳句らしい芸術たりうるのは、自然が詩人の心に入ってくる、そして作品に表現された自然が読者の心に進入してくるという〝消極的でいられる能力〟にしっかり裏付けられた十七音であるときである。

感情移入は熱き情緒が対象へもち込まれ、対象まで熱っぽくしないではやまないが、客観移入は、自然がつめたく心の中へ進入してくる。さわやかに冷え冷えしている。心理の層ですぐになま温かくなってしまうようなものは、そこで深化を止めてしまうであろう。いつまでも冷えを失わないものは、いつまでも心の奥深くに進んで行くことができる。

花鳥風月はもっとも心の深い所にまで達することのできる〝客観的相関物〟であるということを発見したとき、俳句は感情を詠むものではなくて、客観を移入させる詩である様式を確立したと考えられる。そういう詩学が稀有であることは、世界の短詩型文学の貧しさを見ても首肯されるであろう。

花鳥風月が冷え冷えと心の底にまで沈潜して行って、そこで主観と対話するようになったとき、十七音はよく全人間的感動をひきおこす。風雅に心を動かすとはそのことである。幽玄とかわびというのも、かすかな客観の移入によって心のあやしい動きのあることをとらえたものであろう。自然は心の客である。こちらから出向いて行かなくても、向うから訪れてくる。

人の体というスーパーシステムも主観的意識にとって自然であり、したがって死もまた心の客である。死が冷え冷えと心の底にまで沈潜して夕爾の主観と対話した時、「虹立つや……」の句を、かつておもしろいと思い表装していたことが思い出されたのではないか。近代という時代がもたらす不安感・狂躁感をとおして、近代の病巣をえぐる詩を巧みな口語自由詩の技法によってとらえた朔太郎のこの句は、その詩とちがって、十七文字の中に束の間によぎった幻想のイメージがたくみに写し出されていて明るい。虹という自然が入って来たとも云える。夕爾はこの句によって心おだやかに過ぎゆく静かな時間を生きたと思える。私たちは身体が滅びゆく時、重い衣をぬぎ捨てて魂が空へ昇ってゆくことをごく自然に受け入れる心を深いところで受け継いで来たようだ。このこともまた〝消

Hosei University Repository

極的でいられる能力〟と通じるものだ。人間の心を動かせてものごとを詠むのではなく、対象の方が動いて詩人の心の中に入って詩となった時、その詩は、深く心を癒す。

「二五歳を過ぎてなお詩人でありつづけるためには、伝統の感覚を身につけていなくてはならない。あるヨーロッパの詩人がそう言ったのは有名であるが、年老いてなお詩人でありつづけるためには、詩をやかましい精神と両立させることに成功しなくてはならない。東洋の詩歌が長寿であるのは、それが東洋ではある程度解決していることを暗示する。」前記、外山滋比古は同じく俳句の「冷え」を論じた文章の中で言っている。夕爾は日本の伝統の感覚を充分に身につけて、それによって近代詩というジャンルにこだわりつづけた詩人であるが、俳句が〝通俗を通じての風雅〟であることの自覚はなかったと思われる。

海鳴りのはるけき芒折りにけり
繭に入る秋蚕未来をうたがはず
毛糸あめば馬車はもしばし海に沿ひ
家々や菜の花いろの燈をともし
鐘の音を追う鐘の音よ春の昼
林中の石みな病める晩夏かな
秋草もひとの面輪もうちそよぎ

これらの句はいづれも夕爾三一歳から三五歳の頃の作で、表現技巧において一部、久保田万太郎の添削があるとは言え、内容における青春性の香気の高さはまさに詩人のものである。しかも夕爾がかつて子供達に「詩は素直な時に生れる。素直な心はおどろきやすい。素直な心の鏡には、日常見馴れた筈の風景や出来事さえも、美しい詩の影を映すことが出来る。そして生れた詩は、作り上げた詩よりも命が長い。時がたっても色があせないし、匂ひも

Hosei University Repository

消えない。」と語りかけた「作るより生まれて来た詩」である。夕爾を「春燈」に誘った安住敦の句に「藤椅子や読むべきものに堀辰雄」の句があったこと、夕爾の蔵書にもたくさんの堀辰雄のものがあったことをこの度の晶子さんの回想記によってはじめて知った。前章（七）では、堀辰雄と木下夕爾の気質における共通性を「含羞」にみて、「含羞と抒情詩」について考察した。そこで気づいたことは、近代という時代の課題を同じような地盤、同じような発想から思索することをはじめながらも、それらを別の道へと進ませる隠れた原因があることであった。一つは、全体的人間という人間像を念頭において、思索し、自己表現する生き方。今一つは全体性への展望を遮断することによって、かえって強度を高めてくる親密な内部世界のリアリティの方を選びとり、そこから全体的人間に対するのとは逆の自己主張をする、いわば存在の底に深く根をおろす樹木のような生き方の二つがあること。含羞の気質が選ぶのは後者である。

安住敦のあとを継いで、「春燈」を主宰する成瀬櫻桃子は、「木下夕爾再考」という一文で夕爾の俳句を詩人の句として評価しながらも、次のように述べている。

反転して言うなら夕爾句は瀟洒（しょうしゃ）で線が細い。居直り切れなかったのである。俳人格と詩人格の違いと言える。

俳句は「居直り」「居据り」精神が無かったら貫けるものではない。屢々（しばしば）俗物性すら有用である。夕爾俳句の終焉に、芭蕉の晩年ことに寿貞尼に先立たれたあとの気弱さを痛感する。

詩の発想の切口から俳句を作ることは俳句独自の形に通暁すれば可能である。しかし俳句の発想を詩に布衍（ふえん）することは至難ないし不可能と言ってよい。

私もまた同感である。しかし、その至難に挑戦したのが堀辰雄であり木下夕爾であったのではなかろうか。近代を受容しながらも、日本語の心、その蒸留水のような部分を守ろうとした稀有な詩人であったのではないか。

Hosei University Repository

以下、この問いを、河合隼雄、谷川俊太郎、大江健三郎の文化セミナーの発言[注]を通じて考えてみる。第一部の講演で河合隼雄は、「日本語と日本人の心」についての話を、谷川俊太郎の詩、「みみをすます」を関西弁で読むことからはじめる。河合によると、〝みみをすます〟という言葉がそうとう日本的な表現であって、ほかの国の言葉ではちょっと言いにくい。なにかひとつのことに注意を集中するのではなく、虚心担懐に〝みみをすます〟ことを英語で言おうと思うと、対応する言葉がない。そこで思い出されたのがフロイトの言葉であった。「われわれ精神分析家は平等に漂える注意を持たねばならない」とフロイトは説く。〝平等に漂える注意〟というのは、英語とかドイツ語でいうと実は自己矛盾して居る。〝注意〟というのは一点に集中することでそれが〝平等に漂える〟ということになると注意ではなくなるからだ。おもしろいことには、そういう矛盾をふくんだ「平等に漂える注意」という言葉を発明してフロイトが言わねばならなかったことを、日本人は日常語に持っているということだと河合隼雄は指摘する。これは、夕爾が子供達に語りかけた失われやすい、「素直な心」ともつながっていて、素直な心をもつ時、「耳も澄んでくる」のではないか。日本語は身体性とかかわる言葉を非常に多く持つが、それを安易に翻訳可能な言葉にかえることなく、それを通して、日本的なものの深層にある仏教の哲学、自然科学的世界観と全く逆の世界観、大乗仏教の「信如」まで言及しているのが河合隼雄である。日本語の心の地下水を掘ることで存在を支えているものを探ろうとする河合に対して、ノーベル賞・作家大江健三郎は、翻訳可能な普遍的言葉による伝達を重視して「言葉はできるだけ普遍的な意味を持ちうる言葉を使ったほうがいい。それによって日本人固有のもの、深いものを表現したい。そうすれば日本独自のものが、世界全体の知恵になる」といった発言をする。〝翻訳は外国の概念や思想の単なる受容ではなく、幸か不幸か外来文化の自国の伝統による変容〟であることに小説家は詩人や心理療法家より楽観的であるようだ。大江の発言に対し、谷川俊太郎は、

「ぼくは、もちろんその方向も必要だとは思うけれども、自分が詩を書いているときは、われわれがふだん何気なく使っている漢語ー西欧的な概念を中国の文字を通して日本語に移しかえた言語――をできるだけわれわれ

Hosei University Repository

の本当の母語に近づけたいということです。具体的に言うと、たとえば平仮名にひらくということもその一つですが、それと同時に、いまだにわれわれの身についていない「民主主義」なら「民主主義」という言葉を、われわれが実際に暮しながら経験を積み重ねていくことで、いまは何か一つの硬い殻みたいに思われている言葉に、もっとからだとか生活に結びついた豊かな意味を与えていくことができないか、ということなんです。

いま全部平仮名に戻れといったってそんなことをしたらコミュニケーションができなくなります。だから、いまある漢語に本当は日本人自身の意味を与えていくということが必要だと思います。

その場合、それが西欧的な概念をもっと深くわれわれのものとすることが可能かというと、ぼくは必ずしもそうは思っていなくて、もっと日本的なもの、あるいはもう少し広くアジア的なものをそこに内容として与えていくことで、ヨーロッパ、アメリカから来たいろんな概念をもうちょっと違うものに変えていけるんじゃないか。現実にまたそういうことも起こってきているという感じがするんです」

家庭内で話をするにしろ、友人と語らうにしろ観念語をなるべく避けて、その観念がよって立つところの日常感覚みたいなものにできるだけ近づけた言葉を使うことは、そのまま夕爾の生き方であり、詩論でもあった。本来のやまとことばのもつ母音のやわらかさと洗練された感覚によってとらえられた日常語がさりげなく詩語となっているのは夕爾の詩の特質で、それはまた、夕爾の含羞の気質とも深いところで通じていた。夕爾の抒情詩や俳句のすぐれたものは、いわゆる〝近代的自我〟によって感情を表出するというより近代的知性によって、むしろそれが抑えられていることを感じるだろう。近代を生きるための日本語の可能性が模索された結果なのだ。

同人詩誌『木靴』創刊十年にあたって、夕爾は「〝知性の祝祭による新しい抒情詩の追及〟とでも言い得ようか」と自ら主宰する詩誌の主張を記しているが、夕爾の場合、その抒情は、失ったもの、過ぎ去った時間を哀惜したものが多く新しいとは言いがたい。しかしひるがえってみれば、一九四五年以来の時間の流れは日本人にとって、日本語を支えていた心や形が急速に喪失されてゆく時間であったと今では思える。

Hosei University Repository

失われて行くもの、古風な人情の往き交いを真正面から見据えて描いたのはなんといっても小津安二郎の映画である。この監督、最後の作品『秋刀魚の味』をこの夏、観た。この映画は一九六二年（昭和三七年）のもので以前観た記憶がかすかにあったが、その時、感じず今、改めて感じたのは、家庭の家庭らしさ、家庭のなんとない空気、その匂いや肌ざわり、それらをひとくくりにした家庭の情緒のようなものが、今は全くなくなってしまったという思いである。家庭を持たなかった小津のファンタジーとしても、リアルで身に泌みると思っていたら、木下夕爾の長女、晶子さんの『父・木下夕爾』をいただき、小津映画とオーバーラップする場面を読みながら何度も味わった。そこには、まだ人間本来の言葉があり、父、娘相互の澄んだ心のふれ合う音が聴える。周囲の人たちへの思いやりも過不足なくあって、淡々とした語り口で過去がありのままに呼びだされている。

木下夕爾の文学の背景を示すもっともふさわしいものと思うので、許しを得て『資料』として前半の部分を掲載しておく。

回想記は末尾に「この三十数年、父の残したものはほとんど読まず、思い出は自分の中にだけ閉じ込めてきた。人様の前に、話したり書いたりしたことはなかったが、今回無我夢中で書いた。今、読み返してみると拙く恥ずかしいかぎりだ。」とある。

この章　完

注　一九九五年、絵本・児童文学研究センター主催「児童文学ファンタジー大賞創設記念第二回文化セミナー」『日本語と日本人の心』第一部、第二部はその記録

〈参考文献〉

（1）大江健三郎・河合隼雄・谷川俊太郎『日本語と日本人の心』岩波書店

（2）外山滋比古『俳句的』みすず書房

（3）成瀬櫻桃子編『木下夕爾句集』ふらんす堂

（4）宮崎晶子『父木下夕爾』『桔梗』（俳誌）一九九六年五月より一九九七年十月まで連載

Hosei University Repository

《資料》

父　木下夕爾

宮崎晶子

「桔槔」一九九六年五月～九七年十月連載

手紙

年年歳歳花相似たり
歳歳年年人同じからず

今年も春は巡って来る。そして花もまた忘れることなく咲き匂っている。年を追うごとに花に対する気持が深くなっていくのはなぜだろう。卒業、入学、社会へ巣立つこの季節になるといつも思いがあふれてくる。

ここに一通の古ぼけた手紙がある。

謹啓
このたび、
お宅様へ上月さんと御一緒にお世話になることがかなへられ千万ありがたく厚くお礼申しあげます。何にも知らない娘でありますがどうかよろしくお願いいたします。
まことに失礼千万でございますがとりあへず書面を以ってお願ひ旁々一筆。
四月四日　　恐々不備
木下晶子儀
木下夕爾拝

Hosei University Repository

昭和三十九年四月、親の反対を押して東京の大学へ入学した娘のために、父が下宿の女主人Mさん宛に持たせた挨拶状である。その時中身については知らなかったが、柿渋色の出雲の手漉和紙の封筒に入った手紙であった。翌、昭和四十年八月、父が死んだ後にMさんから返された。形見にしなさいということだったと思う。他に父からの私宛の手紙が何通か残っている。誰でもそうであろうが、家を離れて初めて親から手紙をもらった。うちの場合は筆不精な母が小包みを送り、父がもっぱら手紙を書いた。

子供が家から離れ、亡くなった父の齢を迎えて私も今あの当時の親の気持をやっと辿ることができる。

父からの手紙はどれもそっけないほど短いものばかりだ。洒落たフランスの版画を使った自家用箋、父は服装には全く無頓着であったが、原稿用紙や便箋は幾種類か作ってちょっとだけ楽しんでいた。

「夜更しをしないように」とか「伝染病に気をつけなさい」と書かれたものもある。東京オリンピックを控えていた東京であの頃流行病いなどあったかしら。五月、六月少し生活に慣れた頃の手紙には、井伏鱒二先生、俳句の安住敦先生、早稲田時代の恩師山内義雄先生などをお訪ねするよう指示したものもある。恐らくこれらの先生方から娘を寄越すように親切な申し出があったのだろう。私は気がきかないボンヤリな娘であったから、失礼や粗相がないよう人を訪ねる時の気遣いが書かれている。そして「休暇になったら早く帰るようになさい」と最後は結んでいる。

最初の夏期休暇は私はすぐに帰省しなかった。遊んでいたのか何か用事があったのか。父は大変機嫌が悪かった。しかし家に帰る時は必ず駅に迎えにきた。私にはそれがとても煩わしかったが父はいつも来た。当時は新幹線もなかったから、九州行きの長距離列車で福山には早朝着いた。汽車を降り顔が合って「ただいまー」と言う私にちょっと手を挙げて「やあ」と言うだけ。カバンを持ってサッサと早足で行ってしまうので、いつも途中逸れてしまい別々に帰ったりした。

最後の手紙は翌年四月十九日付のもの。冬休みの帰省の頃から体調がすぐれなかったが、春休みの時も迎えに来てくれた。そして帰宅すると父はすぐに横になった。この後、五月に入院するのだが手紙には「病気はほとんど快

Hosei University Repository

くなりました。ぶり返さないよう要心しています」と書かれている。大ウソついて……と今は思うが心配させたくない気持ちでいっぱいだったのだろう。そして夏休みにはもう迎えに来ることができなかった。

三十数年も昔のこと、すっかり忘れたような気もするが、しっかり刻まれて決して忘れられないこともある。父のこと、父が好きだった人たちのことを少しづつ思い出してみようと思う。

散歩

子のグリム父の高邸春ともし
児の本にふえし漢字や麦の秋

これは父の句集『遠雷』に入っている。子供を題材にした句を目にすると、ふと思うことがある。子って私のことかな、四歳違いの弟のことかな。本当はそんなことどうでもいいのだけれど、父母や弟と過ごした幼い日のことを思い出すものだから。

小学校に上ったばかりの頃は、まだ自分の勉強部屋というものを持たなかったから、私は父の書斎で勉強していた。書斎というと聞えはいいが、家は古かったし蔵書で部屋は大分傾いていた。本や手紙など雑然と置かれた座り机で、父は書きものをし、私は宿題の絵日記を描き、物語を読んだ。勉強を見てくれることはなかったが、よく鉛筆を削ってくれた。きれいな形に、父は鉛筆を削るのがとても上手だった。

また、私たち兄弟に父はよく「お話」をしてくれた。自分が読んでいた本からの、作り話ででもあったのだろうか。中国の昔の話が多かったように思う。旅の途中病気に罹り、思わぬ特効薬を発見した人の話とか、人が虎になってしまう話など、大方は忘れてしまったが、主人公の名前はいつも決って、ジュンさんとアキさんであった。

Hosei University Repository

また私たちをよく散歩に連れ出した。待宵草やアザミが咲いている小川の辺を、ただブラブラ歩くだけだったが、枯れたアザミの花茎の中に、白い小さな虫がいることを教えてくれたのも父だった。栗の中にいるクリノムシと似ていて、釣りの餌に使うのだと言った。私は蛆虫に似たこの虫が気味悪く少し恐かったが、枯れたアザミの花を摘んで何十匹か取り出しては、何度か父に売りつけたことがある。

家業は薬局で、父は薬剤師であったが、店はほとんど母にまかせきり、出かけて留守のことが多かった。薬剤師不在の薬局なんて、田舎とはいえ随分のんびりした時代だったものだ。父が家に居る時は、大体いつも来客中であった。家族揃って食事をするようなことはめったになかった。

そういえばこんなこともあった。父と散歩していた時のこと。家から遠くない加茂川の辺、稲月山付近だったか。知らない男の子たちが、鳶をつかまえて棒切れでつついては騒いでいた。鳶はケガをして飛べなかった。父は男の子たちと話をつけたのであろう。その鳶を譲り受け家に連れ帰った。「空気銃でうたれたらしい、かわいそうに」父はそう言って傷の手当てをした。傷が治るまでは飛ばないように、羽根を少し切って、空になっていた鶏小屋で飼うことになった。どんな餌をやったか覚えていないが、母が世話をしたのだろう。鳶は日増しに元気になった。飛び立つことは出来なかったが、ヨチヨチ歩いて鶏小屋をぬけ出し、自由に歩き廻った。が、ある日、傷口に蛆虫が湧いて治療しなければならなくなった。夜、近所の大人や子供たちも見物に来たが、私はかわいそうで見ていられなかった。それでも気になって物陰からそっと覗く。「アー、死んだ」誰かの声が聞えた。私はまっ暗な書斎で一人泣いた。人の輪の中に娘がいないことに気づいたのだろう。父は私の所に来て、灯りをつけ慰めた。「蛆虫だけを殺そうとしたんだが、薬がちょっと強すぎた。しょうがなかったんだよ。」

私はそばの紙片にこう書いた。「七月十二日。きょうトビが死んだ。」この紙きれは、随分長い間持っていたが、いつの間にかなくしてしまった。

小学校一、二年頃の思い出である。

Hosei University Repository

『児童詩集』のころ

小さなみなとの町

母とふたりで
汽車でとおった
小さなみなとの町

たれかのたべのこした
アイスクリームが
窓わくのところでとけていた

汽車のとまっているあいだ
波の音がきこえていた
つくつくぼうしが鳴いていた

それだけをはっきりおぼえている
もう二度とくることもないだろうと
おもいながらとおりすぎた
小さなしずかなみなとの町

『児童詩集』

Hosei University Repository

『児童詩集』というタイトルの詩集は、昭和三十年十一月に木靴発行所によって出されている。父は詩集や句集を何冊か自分で出しているが、どれを出した時も私はよく知らない。多分、母でさえよく知らなかったのではないだろうか。何十冊も束にして書斎に置かれているのを見て、ああ、本を出したのだな、と知ったのではないかと思う。しかし、この『児童詩集』のことはよく憶えている。

その頃、離れにあった私の勉強部屋へ、渡り廊下を渡って父が来た。「僕はこんどこの本を出したから、晶ちゃんに一冊あげます」少し改まって父はそう言った。そして本の扉にペンで〝木下晶子様　木下夕爾〟とサインした。私もちょっと改まってびっくりした。大判で少し薄手の、ちょうど画用紙を半分に折って綴じた、といったスタイルのとてもきれいな本だった。父の親友の画家、中山一郎氏の手になるもので、表紙は白地に緑色で燭台が描かれていた。廻りに蝶や巻貝もあって、中はどのページにも電車のつり革が印刷されていたように思う。美しい本であったことと、自分が一人前に扱われたことがうれしかったので強く印象に残っている。この詩集は、何年間かは私の本箱にあったが、いつだったか父が来て「読みたいという人がいるからちょっと借りるよ」と、持って行ったきり返ってこなかった。私の名前が書かれたこの本、今どこにあるのだろう?まだどこかに残っているだろうか。

『児童詩集』に挿絵を描かれた中山先生には、私は小学校に入った頃から絵を習っていた。毎日曜日、電車で通った。「こういう絵を描きなさい」「ここはこうした方がいい」と指導されたことは一度もない。「いつでも使えるように、パレットには全部の絵具を出しておくこと。水はよくとり替えてきれいな色を使うこと」それだけを言われた。戦後、皆が貧しかった頃、先生の絵も売れなくて、父や知人の子ども二、三人から始まった教室であったが、自由でのびのびした大変楽しいところだった。好きな動物や夕焼の絵を描いたり、天気の好い日には川の土手へ写生に出かけたりした。

学校の行事には決して来たことがない父だったが、この絵の教室だけには時々ついて来た。中山先生に会うのが目的だったのだろうが、子どもたちが思い思いに描いているのを隅の方から眺めていた。絵が終ると父と先生は福

Hosei University Repository

山の街へ出かけ、私は一人で家に帰った。ただ絵を描くのが楽しくて、結局六年間通ったように思う。

十数年前、里帰りしていた福山の街で中山先生に偶然お会いした。先生はすっかり頭も白く、髭のおじいさんになって居られたが「絵の教室の頃が一番楽しかったなァ、夕さんも僕も若かったあのころ」と仰言っていた。その中山先生も昨年亡くなってしまわれた。

夏の日

〝井伏〟という名前は〝井伏のお兄ちゃん〟の名前で知っていた。私の田舎ではその頃〝イブセ〟とは言わず〝イブシ〟と呼んでいたが、その井伏章典さんを、父は「ショースケさん」と呼び、私は「イブシのおにいちゃん」と呼んでいた。

東京の大学を卒業して、広島県芦品郡戸手にあった県立高校の、国語の先生になられたばかりの頃だったと思う。私が通っていた幼稚園も、同じ戸手にあったので、朝の電車で時々一緒になった。幼稚園まで送ってもらったこともある。通勤の途中、駅までは自転車で、うちの前を通られるので家にも立ち寄り、父や母とも親しくおつき合いをしていた。

しかし、父の話の中にもう一人の〝井伏〟という人の名前が出てくるのを、いつの頃からか知っていた。お兄ちゃんが「叔父き」と言い、父が「イブセセンセイ」と呼ぶその人。父にとって何か特別に大事な人、と思っているのが私にもよく伝わっていた。

その〝センセイ〟が家に来られることがあると、父はそわそわして、まるで生徒のように畏まっている。そういうふうに私には見えた。お酒を飲んだり、一緒に釣りに出かけたらしいが、私には〝センセイ〟の印象はほとんどなく、父の緊張ぶりだけが記憶に残っている。ちらりと見たその風貌と、ショースケさんの名前の連想から、「イ

Hosei University Repository

ーブシマースジさん、朝寝朝酒朝湯が大好きで、それで身上ツーブシタ」などと歌って母に叱られたことを思い出す。

小説家の井伏鱒二とわかったのは中学生になってからだった。『屋根の上のサワン』を読む頃には、章典さんがただ一人の甥御さんであること、有名な作家であることも知っていたから、客人のおられる書斎には近づかなかった。父が井伏先生を尊敬し、敬愛したのは終生かわらなかった。こんなつまらないことまで憶えている。

暑い夏の日であったと思う。珍しく母は出かけていた。薬剤室にいた父が呼んだ。「晶ちゃん、ちょっと店番たのむよ。行水してくるから」お客さんはほとんど来ない夏の昼下り、開け放したガラス戸からギンヤンマだけが入ってくるような田舎の薬局。父が風呂場に行った直後、汗を拭きながら若い男の人が入って来た。何か早口に挨拶したが、強い訛りがあって、何度聞いても「イブシのモンセイです」と聞こえた。

アッ、あの人、お父さんが大切に思っているあの先生。私は急いで父に知らせた。「イブシのモンセイ？何のことかなあ？」父は訝(いぶか)しがったが、「学生みたいな人よ、あの井伏先生の門下の人のことじゃないの」

私の言葉に父は慌てて店に出て行った。行水はできなかったであろう。でも私は父の役に立った気がして一人満足した。暫くしてから尋ねた。「あの人、井伏先生のお客さんじゃなかったの？」父は私の頭を軽くコツンとたたいて言った。「晶ちゃんのカンちがい。伊吹山の艾(もぐさ)売りだったよ」

父が亡くなってからも、帰郷のたびに新幹線で関ヶ原を通る。関ヶ原を通過しながら遠くに伊吹山が見える。白く雪を冠っていたり、夏山だったり。列車はすぐに通り過ぎてしまうけれどいつも思い出す。訛りの強い艾売りの青年、父が大好きだった井伏先生のこと、それらのことが超特急で頭をよぎる。伊吹山では今も蓬を刈っているのだろうか。今も艾を作っているのだろうか。

Hosei University Repository

季節

子どものころは季節の移りゆくさまを何によって感じていただろう。自然の様子？食べ物や暮らしの中で？遊びにだって季節の流行はあった。しかしそんなことは意識したことはなかっただろう。

おとなになっていま昔の日々を思い出す時、部屋に飾られた絵や書など掛物の中の季節がはっきりとよみがえってくる。

井伏先生の「牡丹」の絵が掛けられていたのは春だったろう。幅広の軸に赤と緑と紫で牡丹が一輪描かれていた。戦争中か戦後か、絵具が手に入らなかったからインクも使ったと聞いた。質の悪い紙にうすい色で花が、絵の脇には

大輪の尺にも余る大牡丹
けふをさかりと咲きさかるあはれ

と書いてあった。咲き誇る真ただ中の花にあはれをみた詩の心を、当時の私がどのくらい理解できたかわからない。しかし不思議な色の絵とともに、忘れられないコトバとして残っていた気がする。

長押の上に掛かっていたのは額に入った色紙だった。うすくて小さい字で、何が書いてあるのかわからなかったから私は机の上にのって見たのをおぼえている。

夕爾君におくる

セルの肩月の光にこたへけり

Hosei University Repository

あれは面相筆で書いてあったのだろうか。細い小さな字で、万とサインがあった久保田万太郎先生の色紙だ。句集『遠雷』に序としていただいたものだと思う。父はごく偶に着物を着ていることがあった。無造作に兵児帯をしていた姿を思い出す。痩せた父の肩が、月の久保田先生に向いているのが見えるような気がする。この額はセルの時季を過ぎても、ずっと部屋の高い所に掛かっていた。

藤椅子や読むべきものに堀立雄

これは俳人・安住敦先生の句。中学から高校時代、堀辰雄は私が大好きな作家だったから、安住敦は名前は知らなくても、この句に接すると堀辰雄が一層身近に感じられた。安住先生も堀辰雄がお好きだったのだろうか。父の本棚にも堀辰雄の本はたくさんあった。

父が安住先生を親しく、尊敬していたのは知っていたが、直接お目にかかったのは父の死後だ。昭和四十一年八月（没後一年目）定本として句集が、十一月に詩集が出たが、全部安住先生のお世話になった。句誌〝春燈〟の仕事をなさりながら、こんなに大きな大きな贈り物を父のためにしてくださった。どんなに感謝してもし足りない。

父が亡くなった時、病室の床の間には

虹立つや人馬賑はふ空の上　　朔

という短冊を表装した軸が下げられていた。この俳句をみたのはその時が初めてだった。萩原朔太郎の句だそうだ。退院して来た父が自分で掛けたらしい。なぜ空の上で人馬が賑わうのか、句の意味がよくわからなかった。しかし父が空の彼方に逝ってしまった時だったから、空の上も寂しくないような、偶然にしては不思議な気がした。朔太郎が酔っぱらった時書いたそうで字も間違っていた。

Hosei University Repository

けんちこひしやよさむのばんに
あちらこちらでぶんがくかたる
さびしいにはにまつかさおちて
ほんにおまへはねにくうござろ

全部ひらがなで書かれた大きな掛軸。子どもの時から何度も見た。井伏先生の『厄除詩集』の中にある有名な詩だ。父のものを少しづつ片づけはじめた頃だった。部屋の隅の抽出しから古い手紙が出て来た。そのほとんどが井伏先生からのものだった。

手紙もハガキもみんな残してあった。ああ、本当に父は井伏先生が好きだったんだなあ、と胸を打たれた。

論詩至建安

詩を論じ、建安に至る。これは清水比庵の軸だった。薄墨で書かれたとても味わいのある風流な字だった。この書については父に意味を尋ねたことがある。

中国の古い時代、建安という年号があってね、たくさんの優れた詩人が出たんだ。詩人が世の中に理解されてとてもいい時代があった。お酒を呑んで詩の話をしているうち、そのすばらしい時代に話が及んだ。

そういう意味の解説をしてくれた。

中国ではね、詩は天下第一の学問でね、詩人は世の中にちゃんと認められて高い地位にあった。詩人が認められるのはいい時代なんだ。とも言った。

この時は父もお酒が少し入っていたと思う。詩人にとっていい時代があったことを、本当に楽しそうに話したの

Hosei University Repository

をなつかしく思い出す。

釣り

この季節になると実に多くの種類の果物が店先に並ぶ。桃、梨、柿、林檎、青蜜柑、葡萄、無花果、栗、スーパーではあけびまで売られたりして、数えあげればきりがない。もっとも今ではほとんどの果物がビニールハウスで栽培される時代だから、一年中いつでも手に入るし、ありがたみも薄れてしまっている。

しかし葡萄一つとってみても随分種類がふえた。粒の大きなもの、しずく形の細長いもの、うす緑と茶色のつや、かなもの、甲斐路などとステキな名前をもって旅情を誘うもの、日々の品種改良から生まれた賜物であろう。

子どもの頃食べた果物は種類も少なく、現在のように甘味の強い、形のきれいなものではなかった。酸ぱくて虫喰いがあったり、見てくれは悪かったがおなかと心をおいしく充たしてくれたような気がする。

学校から帰ると、初夏はイチゴミルクのおやつを食べた。モミ殻のついた林檎や紙に包まれた二十世紀も好きだったが、葡萄は皮をむかずにすぐ食べられるところがよかった。

父も葡萄が好きだった。俳句や詩にもよく登場している。豊富に出廻る頃になると自家製のぶどう酒を作っていた。紫色のつやつや光る、あれはベリーAの種類だったろうか。茶色の大きな甕に、父の細い指が一粒づゝつまんではつぶし入れた。「フランスのぶどう酒がおいしいのはネ、若い娘さんが素足で樽の中の葡萄を踏んで作るからだよ」などと言いながら。

甕は紙のフタをして書斎の隅に置かれた。何日か経つと葡萄の発酵するすえた匂ひが部屋に漂った。どうにか自家用酒が出来上ると、父は調剤室のビーカーや濾過紙を使って滓を濾した。何度か濾してもポートワインのような透明なルビー色のぶどう酒にはならなかったが、子ども用に甘くしたものを時々飲ませてもらった。飲むたびに胸

Hosei University Repository

がワクッとなったものだ。ぶどう酒が手に入りにくかったわけでもなく、もっとおいしいものを飲むことが出来ただろうに。葡萄の色や姿、その作る過程を父は楽しんでいたのではなかったかと思う。

また同じ季節、弟とよく釣りのお供をした。ちょっと時間があると一人でも父はよく釣りをしたが。

家の近くの加茂川（上流には井伏先生のご実家があった）や、神社の裏の池で、釣れるのは鮠が多かった。弟はすぐに釣りのコツを覚え、何匹も釣り上げた。しかし私は竿を振るといつも草むらや、近くの小枝にひっかけた。その度に父はそばに来て、眼鏡をはずしもつれた糸をほどいた。やっと浮子が水面に立つと今度は餌をとられた。「ほら、引いている」と言われて竿を上げると餌だけがなくなっている。

「いいか、浮子が動く瞬間に竿を上げなくちゃダメなんだよ。釣りは〇・一秒のタイミングなんだから」

糸がからまったり、こんなことが二度三度続くと父はだんだん不機嫌になる。私もつまらなくなってくる。竿を投げ出して川岸のぎしぎしをしごいたり、笹舟を流したりしながら二人の釣りを見ていた。

二人は二〇センチもあるアカマツを釣った。オイカワというのが正式な名前かもしれないが、秋の産卵期、腹が赤と緑の虹色のだんだらになった魚で、私たちはアカマツと呼んでいた。暮れ方の川原で、この魚はそれは美しい色をしていた。

魚籠の魚は帰り際、みんな川に放した。アカマツや大きな鮠が何十匹も釣れた時は持ち帰って料理した。

「殺生したんだからちゃんと食べなければ魚がかわいそうだ」そう言って父はカミソリで魚の腹をさいた。新聞紙の上に魚の浮袋がいくつも並んで、それは小さな風船のようだった。母が面倒くさがったので、この作業を父はいつも丹念にやっていた。ちょっと泥の臭いがして好きではなかったが、唐揚にして南蛮漬にしていたように思う。

父はあんなによく釣りをしていたが、釣りを詠んだ俳句も詩も不思議にない。釣りをしながら何を見ていたのだろうか。何を考えていたのだろうか。

Hosei University Repository

映画

映画が好きでよく見る。洋画も邦画も、ロードショウ、テレビ映画、貸ビデオ、見たいものがあると厭わず出かけて行く。映画好きなのは親ゆずりなのかもしれない。

映画を見る、と言うと遊んでばかりいて、ナマケモノのように田舎では言われるけれど、映画はもっともっと見なければいけない。というふうなことを父は常々言っていた。

テレビはまだなく、娯楽といえば映画で、全盛期であった時代でも、当時の田舎の人たちは皆よく働いたから、映画を見ることに多少の後ろめたさがあったのだろうか。

母や私たち子どもにもすすめたし、自分でもしょっ中行っていたように思う。福山市の文化連盟かなにかが推薦する映画の選定委員の一人にもなっていて、雑誌や地方紙に映画批評も書いていた。近郊の映画館のフリーパスを持っていたが、自分の見たい映画の時はパスは使わないと言っていた。フリーパスで入ると、映画批評を書かなくちゃ、と緊張して見るから本当には楽しめない、という理由でお金を払って通っていた。どんな映画をよく見たか、主に洋画だったと思うが、西部劇やマカロニウエスタンも大好きだった。ピストルのドンパチは私は好きではなかったので一緒に見てないが、弟をよく連れて行っていたように思う。

「スクリーン」「映画の友」「キネマ旬報」など父の読んでいた雑誌を私もよく覗いては、映画の、都会の空気にあこがれていた。

小学校の六時間目の授業が終って校門を出ると、父が待っていたことがあった。父親参観日でも学校には来たことがないのに「福山の街まで映画を見に行こう」と言う。学校の帰り寄り道をしてはいけないことになっていた。クラスの男の子が私の動向をふり返りながら見ている。「親がついているんだから心配ない、とてもいい映画だから一緒に行こう」と、父にしては珍しく何度も誘ったが私は行かなかった。結局父一人がバスで街に行った。

「曇子は妙に頑固なところがある」と後で父はこぼしたと聞いたが、この時父が見せたかった映画は何だったろ

Hosei University Repository

うか。「汚れなき悪戯」だったような気がするが、はっきりしない。この映画中の「マルセリーノの歌」が好きだったのか時々口ずさんでいた。

先日私が見たのは「パンドラの箱」という昭和初期のアメリカの無声映画だった。横浜近代文学館で開かれている「大岡昇平展」に関連して上映されたものだ。映画の内容についてはさておき、私が興味を持ったのは、この映画の主人公が〝ルル〟という名前だと聞いたからだ。

子どもの頃犬を飼っていた。中途半端な毛の長さの茶色の雑種で、なかなか茶目っ気のあるいたづらな犬だった。父が〝ルル〟と名をつけた。昔みた映画の主人公の名前で、とてもおもしろい、いい映画だったと言ったのをおぼえていたからだ。私は長い間、父の見たルルの映画を見たいと思っていたが、それがこの「パンドラの箱」かどうかはわからない。ルルを演じたのはハリウッドの美人女優、ルイス・ブルックス、小悪魔的な美少女の役で、この映画は今日見ても大変新しく魅力的な映画だった。

詩のお客様で、何時間か書斎で話した後一緒に映画に出かけることもあった。客が若い女性であったりすると父は小学生の私を誘った。田舎の人の目を配慮したのであろうか。私はおませな子どもであったから「お母さんはやきもちを妬かないのだろうか」と思ったりしたが、母はにこにこと三人を見送り、自分は店番をしていた。

この時どんな映画を見たか、まるきり覚えていない。見終った後、喫茶店で銀色の容器にのったまるいアイスクリームを食べさせてもらったのだけははっきり憶えている。それから父と電車で帰った。

クリスマスのころ

冬ざれの野原の見わたせる仕事場へ
わが子はふところ手でかえってきて

Hosei University Repository

けさは池に氷が張っていたという
霜に濡れたビナンカヅラの実を縁側にならべクリスマスのお菓子をこさえようという

（「東京行」より）

廊下の一番端にあった私の部屋は、昔は茶室風に使っていたのであろう。小さな床の間、小窓、それらしい設(しつら)いがしてあったが、私は「リボンの騎士」の切り抜きや、色紙で作った輪つなぎを壁に留めて好き勝手に使っていた。

庭には幾種類かの木が植えられ、小さな蹲踞(つくばい)の横には斑入りのアオキが冬になると赤い実をつけた。ナンテンやマンリョウの実もいよいよ色づいてくると、私はクリスマスツリーのことが気になった。

十二月も何日か過ぎると父にせっついて、墓地に隣接したうちの山にクリスマスの木を切りに出かけた。少しばかりの雑木の山だが、樅の木が何本か生えていた。どの木にするか、大きさ、高さ、樅の木を品定めする時、いつも父はこう言った。

「ほんとうは木を切るのはよくないんだが。こんなふうに木を切っていると、今に日本の山はみんなハゲ山になってしまうんだが」

「まあ小さい木一本くらいならいいだろう」

肩にかついで帰りながら、毎年きまって同じことを言った。私はそれがとてもおかしかった。

陶器の青い植木鉢に、不器用な父が石と土で固定する。何度もひっくり返りそうになりながら。

樅の木のてっぺんには金色の星を、太いモールでできたサンタクロース、赤と白の杖、大小のすず、たくさんの飾りつけがすむと最後に脱脂綿でまっ白な雪を降らせた。

家は仏教だが、不信心、キリスト教にも関係なく、こうしてクリスマスの夜にはケーキを食べ、目が覚めると枕元には本だのお菓子、手袋やマフラーが置かれていて、こどもにとっては楽しみなわが家の行事だった。

Hosei University Repository

これもクリスマスか、お正月が近かった頃のことだと思う。

父が「シミズセンセイから晶ちゃんに」と、丸い包みを抱えて帰ってきたことがあった。

清水先生とは清水良雄画伯のこと。大正から昭和戦前にかけて活躍された画家。学生の頃、「児童文学史」を読んでいて、鈴木三重吉の『赤い鳥』の中に清水良雄の名前を見つけて「あのシミズセンセイ?」と、びっくりしたことがあった。

清水先生は、通っていた幼稚園の門の前に、東京から疎開して戦後もしばらく住んでおられた。急ぎの手紙をよく届けた。朝、母から「カバンの中にあるから、ぜったい忘れないように。大事な手紙だから」と念を押された。先生の借家は速達配達区域外であったし、電話はなかったから。お弁当の時、カバンを開けて思い出し、大急ぎで届けたことも何度かあった。

先生からお手紙がある時は、お迎えが来た。身の廻りの世話をされていたやさしいお姉さんに連れられて、お菓子を食べながら待っている。金平糖やうちわの形をしたとてもきれいなお菓子。先生は巻紙をクルクル廻しながら筆で手紙を書かれた。まっ白な髪で眼鏡をかけて、いつも着物を着たやさしいおじいさんだったように憶えている。

父の持ち帰った包みを開けるとみんな「あっ」と驚いた。中からゴムマリが出てきたが、赤いマリにはこけしの絵が描いてあった。そのころみんなマリつきをしていたが、絵のついたマリを持っている子は誰もいなかった。「外でついて遊ぶと汚れてしまうから家の中だけでね」と母は云ったが、私はこっそり外でついた。どんな大事な絵かもわからず、ただきれいな絵のマリがうれしくて。

マリはそのうち汚れ、やがて絵も見えなくなってしまった。

Hosei University Repository

正月

一年を通じて、私の家では家族そろって食事をすることはめったになかった。都市近郊に住むサラリーマンの家庭にとっては、今ではさほど珍らしいことではないが、昭和三十年ころの広島の田舎では、よその家とは少し異っていた。薬局という商売柄、誰かが店番しなければならなかったし、父のところには来客も多かった。また出かけて留守のこともしばしばだったから。

しかし一月一日だけは違っていた。父・母・祖母・弟と私の五人家族が元旦だけはそろって食卓を囲んだ。ブリ・里芋・大根・人参・ほうれん草などの入ったお清汁に、湯煮をした丸餅のお雑煮。忙しい母がてんてこまいしながら作った重箱のおせち料理。お屠蘇は薬臭いから、と父が用意した赤ワインやチェリーブランデー。祖母が並べた干柿もあって、食卓はにぎやかにごちそうが並んだ。同じ家に住みながら、父と祖母は普段あまり顔を合わせなかったが、この日は全員がそろって本当にうれしかった。

元旦は来客もほとんどなかったから、年賀状が届けられるまでの間、墓地のある山に出かけることもあった。暮れの間に掃除されてきれいになったご先祖の墓にお参りをした。なぜか神社の初詣に行った記憶はない。正月に墓参する風習があったわけではないが、年の改まった気分を味わうために山へ散歩に出かけたのではないだろうか。

人も居ず、山の空気は冷たく澄んで気持がよかった。着物・羽織にマフラーをした父、傍によるとかすかにナフタリンの匂いのする母。赤土の露出した山の斜面にはところどころ小さな穴があいていた。その穴に父が枯草を差し込んでそっと引くと小さな虫がついて出た。どんな虫だったか、そんな遊びをしながら小高い山の頂上に登り、町を眺めた。弱い冬の陽射しの中に加茂川に沿った小さな町が見えた。

一月二日、三日になると父はもう家にいなかった。詩の友だちや俳句の仲間たちと新年会に出かけていたのだろうか。

店の隣りには調剤室があった。〝劇薬〟〝劇毒物〟と紙の貼られた戸棚が並んでいた。調剤室の端の机には、学校

Hosei University Repository

の理科室にあるようなガラス管、試験管、そんな実験道具がうっすらホコリをかぶって置いてあった。

この部屋で父はよく調剤をしていた。祖父が特許を取っていたという〝胃快散〟や〝整腸薬〟を。ガラスのぶ厚い乳鉢に入れた数種類の粉末を、乳棒でよくかきまぜてから、何十枚も並べた薬包紙に分けていく。天秤の一方にはおもちゃのように小さな分銅を使って。父の細い指が端から一つづつ三角形に包んでいく。どの包みも同じ大きさ、同じ形にきれいに並べられていくさまは、まるで手品のようで何度みても見飽きなかった。

「ここは調剤室なんだから子どもが遊んではいけないんだ」と言われていたが、父は店番をしながらここにいることが多かった。それでつい私たちもこの部屋に集まり、居間のように使っていた。

この部屋で父はよく落語を聞いていた。子どものころはラジオが何を喋っているのか、少しもわからなかったが、一緒に聞いているうちにいつの間にか耳が慣れて、中学生のころは落語も漫才も大好きになっていた。

桂文楽、三木助、古今亭志ん生、三遊亭円生。富久、時そば、明烏、芝浜、みんな父と一緒に聞いて好きになった咄だ。古今亭今輔のおばあさんもおもしろかった。江戸落語だけでなく上方落語も聞いたはずだが、おぼえているのは江戸のものが多い。火ばちにあたりながら親子で同じところでクスクス笑って聞いたのがなつかしい。

空気

父、母、祖母、弟と私、家族は五人。どこにでもある普通の暮らしの家だったが、子どものころ、家の中にちょっとだけ違う二つの空気があるような気がしていた。表面的には何もないのに、父と祖母のあいだにお互いに相手を避けているような、そんな気がしていた。

私は祖父のことは全く知らない。祖父という人は父が五、六才のときに死んでいる。短気な怒りっぽい人だったというだけで、父もほとんど記憶はなかったようだ。数年後、祖母は三児をつれ亡夫の弟と再婚している。父に

Hosei University Repository

とっては叔父にあたるこの養父は、大変やさしい人だったらしい。弟も一人生まれる。長男が医科へ進み、次男の父が文科へ進みたい、と言ったときも「男の子が四人もいるのだから、一人くらい文学をやってもいいだろう」と賛成してくれた、と聞いたことがある。「実のお父さんだったら文学なんか許してくれなかったかもしれないな」とも言っていた。結果的には早稲田を中退し、名古屋薬専に行って父が薬局を継ぐことになるのだが。

この養父は新しい薬を次々と考案して、それがよく効くと評判もよく、店もなかなか繁昌していたようだ。薬局経営のかたわら、文化活動にも熱心だったらしく村に演芸場のようなものを作り〝小富士館〟と名付けて芝居を呼んだり、人々に映画をみせていたという。

父にとって理解ある大好きな叔父（養父）だったが、一方実母の再婚にはわりきれない想いがずっと尾をひいていたのだろう。少年期の潔癖性によるものかもしれないが。

頭のスミにはこんな光景も焼きついている。小学に上ったころだろうか。外から遊んで帰ってきた。薄暗くなっているのに部屋の灯りもつけないで、畳の上に父が寝そべり、傍らに祖母が座っていた。祖母の小さな背中が襖の陰から見えたが、入っては行けなかった。

「・百万というお金、どうやって返すんですか……」小さい声でそう言って、父は泣いていた。祖母は黙ったまま動かなかった。

昭和二十六、七年当時の百万円という金額はどのくらいのものだったのだろうか。泣いている父を見たのはそのときが初めてだった。見てはいけないものを見てしまったような気がして、胸がドキドキしたのを憶えている。

それからもう一つ。やはり外から帰ってきたときのこと。父、母、家族の姿はなかったように思う。見知らぬ男の人が数人、家の中にいた。家中をあれこれ物色し、写真や飾り棚、壺やそんなものにまで何やらベタベタ紙切れを貼っていた。……うちのものを勝手に他人がさわって……と抗議したい気持も少しあった。ナンだろう?とその紙切れに触れたとき「さわるんじゃない！」と大声で男の声が叱った。

この二つの出来事にどういう関係があったのか、そのときには私には何も理解できなかった。

Hosei University Repository

借金の保証人になって大きな負債が生じたこと。高利なお金を借りて家が競売にかけられそうになったこと。それらの事がらに祖母がかかわっていたこと。成長するにつれ、少しづつ事情がわかっていった。

祖母は陽気で活動的な人だったが、思慮よりも行動が先行する人だった。身内のためにしたことであったが、それが父を苦しめた。

かつてテレビに〝だいこんの花〟という連続ドラマがあった。森繁久弥の演じる老父がトラブルを引きおこしては、竹脇無我の息子に難題がふりかかり尻ぬぐいさせられる。ホロ苦くあたたかいホームドラマであったが、森繁の老父の上に私は祖母を重ねたりして見たものだ。

文学とか風流などというものは解さない、直情径行型の祖母。時々苦い思いをしながらこの祖母を見守っていた父。私が感じていたのはこういう二つの空気だったのかもしれない。

春

ひばりのす

ひばりのす
みつけた
まだだれも知らない

あそこだ
水車小屋のわき

Hosei University Repository

しんりょうしょの赤い屋根のみえる

小さいたまごが
五つならんでいる

まだだれにもいわない

『児童詩集』

子どものころ、春休みに母の実家に行っていたときのことだ。本家の門座敷に住んでいた親戚のモッちゃんが手招きした。

「晶ちゃん、いいもの見せてあげる、おいで」

モッちゃんの後についていくと芦田川に出た。芦田川は福山を流れている大きな川で、向う岸まではるかに遠い。しかし水が流れているところは一部分で、あとは草むらが一面に広がっていた。モッちゃんの指さした茂みを覗くと、小さなヒバリの巣があった。枯草や細い枝で作られた巣の中に卵があった。それもそばかすだらけの小さい卵が四つならんでいた。ヒバリはどこででも見かけたが、卵を見たのはこれが初めてだった。心臓がドキドキした。モッちゃんは言った。

「いいかい、誰にも言っちゃダメだよ。ショウちゃんに言うとみんな卵をつぶしてしまうから、絶対に言っちゃダメだよ」

大きくうなづいて約束したが、祖母の家に帰ってからも私はこのことを誰かに話したくてたまらなかった。私が来ていることを知って、ニコニコしながら遊びに来た本家のショウちゃんに、私は秘密をもらしてしまった。

「エッ、晶ちゃん、ヒバリの巣知ってるの？どこで見つけたの？」

Hosei University Repository

モッちゃんに口止めされていたのに、私はショウちゃんを案内した。河原の茂みに近づくと、空の高いところでヒバリが激しく鳴いた。うす茶色のそばかすのある卵はちゃんと四つあった。ショウちゃんも目を輝かせて見ていたが

「晶ちゃん、このこと誰にも言っちゃダメだよ。みんなに知られると割られてしまうから。おいで、帰ろう」

山陽本線の福山駅から、中国山地の塩町や三次（みよし）を結び福塩線という支線がある。一輛か二輛で走る小さな電車だが、この線路の土手に春になるといち早く土筆が頭を出す。家ではみんな土筆が好きだった。土筆を摘むのも食べるのも。頭のほほけないしっかりした形の土筆が二、三十本もかたまって生えていると飛び上りたいほどうれしかった。指の先をアクで染めながら土筆を摘み、篭いっぱいになるとこんどは小さなハカマをていねいに外した。母はいつも土筆を卵とじにしていたが、ほんのり苦くておいしかった。

土筆を摘んだ土手の向こうは、一面の麦畑が広がっていたが今はない。麦畑はとっくの昔に消えてしまっている。

毎日、わが家のそばでもヒバリが鳴いている。近くに巣があるに違いない。しかし、私はあの子どもの時以来ヒバリの巣を見ていない。

お酒のこと

昨年の「俳句朝日」十月号を知人におしえられて読んだ。鈴木真砂女さんが連載なさっている『私の交遊録』に、ほんの一、二度の父との思い出を書いてくださっていたからだ。

真砂女さんが初めて福山へいらしたとき、福山春燈会の方がたと父はあちこちご案内した。そのとき父がポケットから小瓶のウイスキーを取り出しては、ときどき飲んでいたことが書かれていた。私はその部分が気になってい

Hosei University Repository

た。

昭和五十年、福山文化連盟が、没後十年ということで父の追悼誌を出してくださった。まだお元気だった安住先生も思い出をいくつか、これに書いてらっしゃる。

先生が初めて福山に見えたとき（それが初対面ではなかったが）、やはり父は隠れるようにしてポケットのウイスキーを飲んでいたことが書かれている。

真砂女さんが福山に来られたのは昭和三十八年、安住先生はそれより三、四年前と思われる。

父はお酒が好きだった。日本酒とウイスキーと。

「これはロシアの強いお酒でね、マッチで火をつけると燃えるほどだよ」と、小さなグラスでグイと煽り、タバコを取り出して吸うまねをして言った。

「だいじょうぶかな、タバコから引火しないかな」

小学生だった私と弟は「やめてやめて」と必死に止めた。引火して父が燃えてしまうと思ったからであった。

父は酔うといつもより少しおしゃべりになり、ニコニコして機嫌がよかった。ベロベロに酔っ払うことはあまりなかったように思う。しかし若い時から好きだったわけではなかった。

亡くなられたフランス文学者で詩人の村上菊一郎さんが同じ追悼誌の中で次のように書いておられる。

――この部屋でいつだったか井伏さんとわたしは、商品の健胃苦味丁幾を、蒸留器にかけて分離したアルコールの水割りをふるまわれたことがある。酒を入手することが至難だったあの時代に、酒をたしなまない木下君は、酒好きの二人をこういう離れ業で歓待してくれたのだった。――

父も戦時中から戦後にかけての、井伏先生との思い出の中に、苦味チンキのことを書いている。

――谷川の釣も、先生から教わったものの一つであった。山野村というところへ度々行った。乗物でなくて、五里の山みちを歩いて行くことが多かった。そこの古ぼけた宿で、苦味チンキを燃やして木炭をおこし、また杯について飲んだことがある。酒は全然といっていい程手に入らない時代であった。先生は、苦味チンキの苦さに顔をし

Hosei University Repository

かめながら「じつにやるせない気持だね」とつぶやかれた。私も何となくわびしい気持で苦味チンキを口に含んだのをおぼえている——

父は三十代半ばから四十代へ、こうして酒に親しみ好きになっていったのであろう。

ポケットウイスキーをしのばせていたことは私も記憶がある。中学生のころではなかったかと思う。父のお酒については、母がひどく心配していた。

「お父さんは酒量は多くないけれど、いつも体にアルコールが入っている。あれはよくない。いまに中毒になってしまうのではないかしら」

母の心配を見ていて父に尋ねたことがある。

「人の前で話をしたり、初めての人や遠慮のある人に会ったりするとき、とても恥ずかしいからそれでちょっとだけお酒を飲むんだ、酔ってはいないんだよ」

そういう答えが返ってきたように思う。母が父のお酒を管理しようとしても、夜中に一人起きて仕事をしていた父、所詮ムリだっただろう。アルコール中毒になる前に他の病気に倒れてしまった。

人に会うのが恥ずかしいから飲む、と言った父の愛用の徳利が私の手元にある。色の工合から唐津のようにも思えるし、伊賀焼のようにも見える。いづれにしても大ぶりの徳利で一合半はゆうに入る。華奢な父の姿には似合わず、私も眺めるだけにしている。

東京音頭

父の書斎にはいくつも本棚があり、そのどれもが家と一緒に少し傾いていた。本棚からあふれた本は、机の廻りにいくつも山を作って積み上げられていた。

Hosei University Repository

階段を下りたところにあった手洗所の前は、やゝ広い廊下になっていたが、ここには雑誌の類が無造作に置かれ『アトリエ』や『みづゑ』という題名などがみえた。

その頃の少女スターと同じ名前の本に興味をひかれて、最初はこれらの雑誌を手にしたと思う。

〝白鳥みづゑ〟の写真はなかったが、この雑誌にはところどころに、別刷になった小さなカラーの絵の写真がはさみ込まれていた。

セザンヌもルオーもゴッホもブラックも、その他の画家の名前もみんなこの廊下の薄暗がりの中で知った。

中学生のころだったか、ある時中庭に面した手水鉢のそばの縁側で、私はこの雑誌からの模写をした。透明なビニールケースに入れる書類入れを、気に入った絵で飾りたかったから。本をパラパラとめくって気に入った絵は――面長で髪を三つ編みにした少女、埴輪のような目をした少女像だったが、なかなか絵と同じ色が出せなくて、絵具をまぜては苦心していた。

「へエー、この絵が好きなの？これはモジリアニだよ。これはいい絵だよ。うん、うまく描けてるよ」

父は機嫌がよかった。お父さんもきっとこの画家が好きなのだなと思った。

「この画家はね、生きているあいだは一枚も絵が売れなかった。この人のことを描いた映画があるよ」

と言っていたのを憶えているが、父が死んで随分たってからこの映画、ジェラール・フィリップとアヌーク・エーメの『モンパルナスの灯』をみた。

主宰していた雑誌『木靴』の表紙にもマチスのデッサンを借用したり、自家用箋にもたびたび絵を用いている。

音楽はどうだったろう。学生時代には兄と競争してレコードを買い集めた、と聞いたことがあるが音楽を聞いている姿をみたことがない。古い抽出しにわずかに数枚のレコードが残っていただけだ。ショパン、リスト、なぜかモーツァルトの父の作ったと言われる「おもちゃの交響曲」が一枚あったが。

歌といえば、父はときどき『東京音頭』を口ずさんだ。東京の民謡とでもいったらいいのだろうか。調子のいい、盆踊りには定番のこの音頭も、父が口にするとなぜか淋しかった。広辞苑によると

Hosei University Repository

〔東京音頭〕　昭和初期の東京をうたう。民謡調の流行家。西条八十作詩、中山晋平作曲。初名、丸の内音頭。一九三三年（昭八）改作され、広まる。と書いてある。

一九三二年（昭七）父は上京して早大予科に入学するが、一九三五（昭十）四月には養父の死で東京を離れ、名古屋薬専に移る。

堀口大学を通してフランス象徴派の詩人たちにふれ、学校でフランス文学を専攻し、文学への夢を持って上京したはずなのに、家庭の事情から方向転換を余儀なくされた。父は黙ってこの決定に従った。無念な思いで東京を去るとき、街にはこの「東京音頭」が流れていたのではなかったのだろうか。

踊り踊るなら　チョイト東京音頭　ハヨイヨイ　花の都のまんなかで　ハァ　ヤートナソレ　ヨイヨイヨイ　ヤートナソレ　ヨイヨイヨイ

小さな声で父がこの歌を口にするのを何度も聞いた。なぜかもの悲しく淋しそうな様子だけがはっきり残っている。

私自身も卒業直前、病気で長期入院のため田舎に帰ることになった。大学は休学になっていたが、もう学校に戻って来られないかもしれない。列車が東京駅を離れ、プラットホームが遠ざかっていくのがひどく侘しかったのを憶えている。私は幸い一年後に復学することができたが。

父は生涯田舎で薬剤師をしたが、東京に来たかったのだ。ずっと東京に出てきたかったのだ。

母のまわり

父の作品には、詩にも俳句にも家庭はほとんど登場しない。弟かな私かな、と思えるスケッチらしきものは少しはあるが数は少ない。母についてはなおさらだ。

Hosei University Repository

かつて人に「どうしてお母さんや家庭のことをうたわれなかったのでしょう」と尋ねられたことがあった。「父は恥ずかしがり屋でしたから」と答えたが、本当のところは私にもわからない。

身近な友人にも家庭のことをあまり語らなかった。唯一の例外と思えるのは近江卓爾さんだろうか。

近江さんは父より少し若く、井伏先生の随筆の中にも時々登場する。若い時は詩を書いたりされたらしいが、学生時代に発病し、病気が完治せぬまま状態は落ち着いて、廃寺となった生家にお母さんと暮らしておられた。

体調がよければ月に何度か家に来られた。近江さんの時だけは母も出て行って一緒におしゃべりをした。

父が不在の時も家に上がられ、世間話をし、私たちとゲームを楽しんだ。生涯結婚はされず、父の死後十年あまりして亡くなられたが、亡くなるまでそれは続いた。

福山で旧制女学校を終え、日赤看護専門学校を出て、結婚までの数年間、母は東京の陸軍病院や、中国の野戦病院で仕事をした。その母のことを

「丙種合格の夕さんや、虚弱な僕と違って、何しろ奥さんは大陸と日本を股にかけての大活躍なんですからなあ」などと言い

「まあ、近江さんからかわないでくださいよ」と、母もおかしそうに笑った。遠慮のない打ち解けた話が続いている間、父はコーヒーを入れ、火鉢の炭を組み直したりしながら、やわらかな表情で皆の話に耳をかたむけていた。

その近江さんでさえ「夕さんは家族のことをほとんど話さなかったなあ」とおっしゃっていた。

ある時、父がソワソワと落ち着かない様子だったことがあったらしい。

「夕さん、何があったの、何かうれしいことでもあったの？」

「……あした、東京から昌子が帰ってくる」思わず漏らした。

「あーッ、夕さんが何と……。娘が帰って来るのがそんなにうれしいかねェ」

と冷やかすと、しまった！というような実に恥ずかしそうな極り悪そうな顔をした。と話されたことがあった。

Hosei University Repository

母は父の仕事に関して一切口を出さなかった。「私は不粋な人間だから、詩や文学のことはさっぱりわからない」といつもそう言っていた。来客のもてなしだけをし、決して話の中に入ることはなかった。家事をこなし、父に替って薬局の店番をした。

父の十周忌に出た追悼誌の中に、誰も知らない未発表の短篇小説『日常茶飯事』が載ったことがあった。田舎詩人を自負する、会社員のモノローグで、妻を通して俗なるものを慨嘆、揶揄している。

母はこれを見た時ひどく嘆いた。知らない人が読んだらどう見たって、あの俗物の妻君は私だと思うだろう、と言った。あれは小説だから、フィクションだから、と私が言っても母には少々こたえた。

確かに母らしき人物、私や弟らしき子ども、モデルはわが家のようであった。が、あれは鏡に写った向こう側の世界ではなかっただろうか。私にはユーモアを交えて、父が自分を厳しく律したのではないかと思える。

父がいた頃はおよそ文学などと縁がなかった母。だから父は仕事ができたのだ。

今、母は街のカルチャースクールで「万葉集」の教室に通っているという。父が聞いたら一体どんな顔をするだろう。驚いた顔をするだろうか、私は一人想像してみる。

資料（一）完